令和２年度　第２回　文京区認知症施策検討専門部会　要点記録

日　時：令和３年２月３日（水）午後１時１５分から午後３時００分まで

場　所：文京シビックセンター２４階　第１委員会室及び、ＺＯＯＭ開催

＜会議次第＞

１　開会

２　議題

（１）　【資料１　１－５】文京区認知症施策総合推進事業の報告

（２）　【資料２　１－２】コロナ禍における認知症のご本人を取り巻く現状

ゲスト：ＤＡＹＳＢＬＧ！はちおうじ

代表　守谷卓也氏・さとうみき氏

３　その他

【資料３】令和３年度認知症検診事業について

【資料４】在宅要介護者の緊急一時入所事業の実施について

４　閉会

＜出席者＞　名簿順（敬称略）

文京区認知症施策検討専門部会　委員

粟田　主一部会長、神戸　泰紀委員、中村　宏委員、作田　和子委員、小倉　保志委員、阿部　智子委員、諸留　和夫委員、藤原　智子委員、鴇田　昭裕委員、近藤　秋穂委員、岩井佳子委員、小川原　功委員、中谷　信夫委員、新堀　季之委員、認知症支援コーディネーター4名　　※来場3名、Zoom参加者15名、欠席1名

＜事務局＞　高齢福祉課認知症施策担当

進課長、高橋、幣原、伊藤、藤原

進課長：令和２年度第２回文京区認知症施策検討専門部会を始める。今回初めてＺＯＯＭを使用した遠隔のテレビ会議となる。欠席は、林田委員。

それでは、東京都健康長寿医療センター研究所副所長の粟田部会長に、議事の進行をお願いする。

粟田部会長：新型コロナウイルス感染症の拡大の影響を受け、緊急事態宣言下であるため、ＷＥＢ会議形式となっている。本日のメインの議題は、「コロナ禍における文京区の現状と今後に向けて」であるが、最初に資料文京区認知症施策総合推進事業報告について事務局から説明をお願いしたい。

進課長：４月から９月までの半期の実績について、ポイントを説明する。

文京区の高齢者人口は、４万3,000人、高齢者の独居世帯が、約１万5,000世帯に上る。要支援、要介護認定者における認知症高齢者の数が、令和２年４月現在、約5,000人。厚生労働省の研究報告書による推計の算出では、認知症の方々が7,300人程。ＭＣＩの方が6,300人程となる。

普及・啓発に関する事業実績では、今年はコロナウイルス感染症の影響により、講演会等は、実施できていない。一部、認PAKU（認知症に寄り添う介護機器展）や認知症サポーター養成講座は、規模や回数を縮小して開催した。認知症支援コーディネーター活動報告では、認知症の延べ相談件数が昨年同時期では1700件に対して、今年度は2334件となっており、コロナ禍における相談件数の増加も伺えた。

今年度から開始した「認知症ともにパートナー事業」という看護師による６か月間の訪問支援事業について。コロナ禍で事業開始が9月以降となり現在２件の実績となり、文京区内の25の医療機関（令和3年1月末現在）のご協力をいただいている。

家族支援につながる認知症カフェや介護教室は、コロナの感染症の影響により、実施回数減となっている。逆に高齢者ゼロ推進事業、行方不明事案についての対策では、ＳＯＳメールの事前登録は、区報等での周知の効果か増加傾向である。

粟田部会長：新型コロナウイルス感染症下で、幾つかの事業は制限がかかり、実績が増えていないということはあるが、しかし、相談支援件数が増えているとの報告があった。私どももコロナウイルス感染症下で認知症の方がどういう状況にあるのかを、電話等で調査したが、「社会的な孤立が強まっている」、「不安が強まっている」、「家族の方のストレスが増えている」等の状況がわかった。従って、こうした相談支援事業が非常に大事なサポートになっているのではないかと考える。文京区独自事業である「認知症ともにパートナー事業」も遅れながらもスタートしたという事で、今後の実績に期待している。

進課長：令和２年度は、コロナ禍の影響により、事業中止・延期を余儀なくされたが、新しい生活様式を受け入れながら、今後の認知症施策を継続的、かつ、安全に遂行するための方法について議論ができればと考えた。高齢者あんしん相談センターの協力を得て、認知

症のご本人を取り巻く状況をまとめた。

まず、コロナ禍におけるご本人とご家族の変化について。

外出自粛により、足腰の筋力低下とか、物忘れの進行、それから受診控えによる治療意欲の低下、また、気持ちもふさぎ込んで、うつ傾向が見られるということから、症状悪化の自覚と意欲全般の低下というのが見受けられた。

相談から見えてくる本人や家族からの“実際の声”について。

「家族が神経質になり、半ば強制的にデイサービスを休まされている」、「楽しみがない、一層、コロナで死にたい」など、先の見えない漠然とした不安感を自覚されている様子が伺えた。

認知症施策への影響と事業継続のための感染症対策の効果や課題について。

オンライン開催が増えているがＩＴを使うことの難しい世代もいる。そうした方々への支援方法について、検討が必要ではないかという意見があった。

それから、認知症の本人のみならず、高齢者の孤立化をどう防いでいくかということも課題として挙げられている。新しい生活様式に適応した認知症施策の新たな展開というのが求められている。

議題２の説明は以上となる。続けて、議題３に移る。

本日、ＤＡＹＳＢＬＧ！はちおうじの代表の守谷氏とさとう氏にご参加をいただいている。ＤＡＹＳＢＬＧ！はちおうじは、「障害があってもなくても豊かな生活を、みんなで集まって感動的なものにしよう」というコンセプトの下に活動されている。４分ほどのＤＶＤ鑑賞後、お二人から活動報告をいただきたい。

（映像再生）

進課長：では、ゲストの方より自己紹介と活動報告を。

守谷氏（ゲスト）：ＤＡＹＳＢＬＧ！はちおうじを運営している。ＢＬＧは、地域密着型のデイサービスである。定員は８名。非常に小さいデイサービスだが、メンバーはほぼ男性で、52歳から87歳の方が共に活動をしている。「想いをカタチに」を柱として、ここに参加する方々の一人一人の想いをみんなでカタチにしていこうという、そんな思いを大切にして活動している。社会参加の一つとして、「働く」を通して、仲間をつくっていこうということを、一番大事に活動している。コロナ禍の現在も変わらず活動を続けている。最初の緊急事態宣言が発出される少し前の段階で、高齢者施設も休業要請があるのではないかと考え悩んだ時期もあったが、通所しているメンバー達から、「休まないでやってほし

い」言われた。理由を尋ねると、「ずっと家にいると認知症の症状が進行してしまう」「仲間に会いたい」「寂しい」そうした声を聞き、メンバーの皆さんに背中を押してもらい、どんなことがあっても営業は続けていこうと決めた。確かに、社会参加、外出する機会が非常に多いため、制限されてしまうこともあったが、できる限り、自分たちの時間を自分たちで守ろうとした。映像にあったようにホンダのディーラーの洗車や、地域新聞のポスティングなど、企業にも確認を取りながら、感染予防対策を徹底し、活動を継続した。家族が、コロナウイルスの感染を心配し、ＢＬＧを休ませたいという連絡もいただいたが、本人の気持ちを聞くと、「行きたい」ということで、ケアマネジャー、ご家族、ご本人と話合いをして、本人の気持ちを尊重しＢＬＧの参加を継続した。現在は休まず元気に全員の方が活動に参加している。

さとう氏（ゲスト）：はじめまして。私は、2019年の１月、43歳の時に若年性アルツハイマー型認知症という診断を受けた。診断を受けて２年が経つ。私が住んでいる地域では、若年性認知症の集いの場や、支援、認知症カフェ等、本人が集える場所がない中で、私が生まれ育った出身地である八王子の守屋氏との出会いがあり、今、当事者スタッフとして、週３回ほどＢＬＧで働いている。最近はメンバーと、ホンダの洗車や、地域新聞のポスティングをしていく中で、当事者スタッフとしては、空間認知症状があるメンバーもいるので、そうしたメンバーのサポートをしながら、一緒に活動をする役割を担っている。

私も当事者として、気持ちや頭の中での混乱というものを、「もやもやする」と表現するが、そうした「もやもやした気持ち」が強いときに、同じくＢＬＧにいるメンバーの中で、1人暮らしで、もやもやして、なかなか何に対しての不安があるということではなくて、漠然とした不安の中で、もやもやしている当事者であるメンバーに一緒に寄り添い話を聞きながら、「自分もそうだよ」ということを伝えて共感し、お互いにヒントを得ながら、日々の日常を、私もメンバーの方からエネルギーをいただきながら活動している。

粟田部会長：DVD視聴と今のお二人のお話から様々の事を考えさせられた。コロナ感染の有無に関わらず、認知症と共に生きるということは、しばしば社会の中で孤立しやすい。必要な情報に届かなかったり、家族や友人・知人との会う機会が減ったり。他の障害と少し違うところがあって、必要な支援に辿り着きにくい。そうした現状が普段からあるが、このコロナ感染症の流行下において、その事がさらに強まっている状況がある。今、さとう氏が話されたように、特にひとり暮らしの方は、もともと漠然とした不安があるが、その不安がさらに強まるということが起こっている。これは平時からそういう孤立が起こらな

いように、社会と繋がるサポートがこのコロナ感染症流行下にあってはさらに強く求められている事が、改めて認識させられた。このサポート事業は、感染症流行下の中でどうあるべきか。一つの考え方としては、こういう状況にあっても、十分な感染対策下で事業を継続していく事、そういうスタンスは持ち続ける必要があるのではないか。これは、ＤＡＹＳＢＬＧ！だけではなく、全ての介護保険事業所について言える事で、医療機関はもちろん、実践せざるを得ないという状況にある。そうしたキャパシティーを持って、事業を継続していくことが重要である。従って、それを実現できるように、サポートする政策なども考えていく必要があるのだろう。ここから先は、皆さん、ゲストの守屋氏、さとう氏にもご参加いただいて、自由に意見交換を。zoom参加の方は画面上挙手またはチャット機能も活用してほしい。

諸留委員：地域福祉推進協議会という会議があり、その資料にも高齢者人口の推移が掲載されていた。令和１年の前期高齢者と後期高齢者の数値の違いがある。統一しておいた方がよいのではないか。それから資料上の「高齢者」という表現について。私も後期高齢者だが、努めて前向きに生きるようにしている。どこかで線引きをすると年齢かもしれないが、この表現がたくさんあると気が滅入る。

進課長：資料に示される高齢者人口推計値について。保健福祉計画、高齢者介護保険事業計画、認知症施策検討専門部会と複数の計画の中で人口推計を算出している。今後は上位計画を確認しながら資料作成を実施していく。「高齢者」という表現についても、一般的な表現として使うのではなく配慮していきたい。

粟田部会長：この推計は、平成30年、国立社会保障・人口問題研究所の日本の地域別将来推計の平成30年推計の出生中位、死亡中位使って、平成30年以降の人口推計が算出されている。これは最も一般的な方法である。平成27年、28年、29年は実測値。実測値と推計値をグラフ化してある。

中村委員：ＤＡＹＳＢＬＧ！はちおうじ！というのは、小規模多機能施設なのか。

守谷氏（ゲスト）：地域密着型通所介護である。

中村委員：認知症の本人同士、お互い一つの場所に集まり、生きがいを感じられる居場所は大事だと思う。その中でも、ＢＬＧのように認知症の方同士が仲間として働く、社会で働くというのは、大事な生きがいだと思う。こうした場所を運営するまでには、大変な努力もあったと思う。他の施設も同じようにできるものなのか。また、意欲がある施設が、どのようにしたら実現できるのかについて教えていただきたい。一歩進んだ認知症の方の施

設であると思われるが、どうしたら実現できるのかコツがあったら教えていただきたい。

守谷氏（ゲスト）：我々は、特別なことをやっているという感覚はない。全てが当たり前のことであり、それを当たり前にしているというだけである。福祉・介護のフィルターを通すと、普通が普通でなくなるということが多くあるが、そこをできる限り取り払うような支援、考え方が必要ではないか。

ＤＡＹＳＢＬＧでは、物作り活動の中で結構刃物を使う。例えば、竹を切って割り、削って靴べらを作る。これは、けがをする可能性もあるが、それが、従来、既存のデイサービス等では、危険だからできないとなる。ご本人がやりたい事ができない。これはもしかしたら、できる事まで取り上げてしまっている可能性もある。福祉のフィルターを通して、色眼鏡で見るのではなく、普通の事が普通に当たり前にできるという、そんな感覚を大切にしている。

最近、当事者の方の話を聞く機会や、介護現場・福祉の現場で利用者の話を聞くことも、多くなってきたと思う。ただそこが、聞いて終わってしまうというとこが、まだまだ多いと感じている。当事者の声をどう活かしていくか、どう行動するか、当事者を含めて一緒に考えていく必要がある。認知症の人だからできない、危ないという、先入観が強いので、そのハードルを下げて、どうしたらできるか？という考え方が必要である。よく「利用者さんと向き合って」という言葉を聞くが、向き合ってしまうと衝突する可能性も出てくる。私たちの場合は、同じ方向を向き、一緒に何ができるかを考えていくような、そんなスタンスで共に活動している。

中村委員：非常に感動的。

粟田部会長：ＤＡＹＳＢＬＧは、この活動を広めていこうということで、100ＢＬＧ計画というのがあったのではないか。その活動は広がりつつあるのか。

守谷氏：100ＢＬＧプロジェクトについて。現在、全国に９か所のＢＬＧがある。研修中のＢＬＧも入れると日本に11カ所ある。みんなでいろいろと学び合いながら、当事者の居場所づくりを行っている。

粟田部会長：就労支援や社会参加支援というと、しばしば若年性の認知症の方と思われがち。政策的には、65歳未満で認知症となった方のことを若年性認知症と表現するが、昔の65歳と今の65歳は状況が違っている。今は75歳未満で認知症となった方も若年性認知症と表現してもよいのではないかと思う。75歳、70歳ぐらいまで働いている人もたくさんおられるので、こうした支援は、いわゆる高齢者の方にも必要な支援である。

小川原委員：質問。ＢＬＧの受入れ可能な対象者について。例えば認知症がなくても、通所

希望があれば参加できるのか。民間事業者の交渉に１年かかったという報告があったが、民間事業者との交渉の苦労とコツについて。作成した靴べらはどうするのか。以上3点について教えていただきたい。

守谷氏：地域密着型の通所介護であるため、どなたでもどうぞというスタンスで受け入れている。ほとんどの方が認知症の診断を受けていらっしゃるが、高次機能障害の方もいらっしゃる。

企業との交渉の苦労やコツについて。ＢＬＧは町田市に最初にできた。やはり前例があると強い。交渉に時間がかかっていたが、町田市で洗車を始めた時の店長が八王子店にいらした事もあり話がまとまりやすかった。タイミングがよかった。その他、駄菓子の販売もしている。学童保育所に駄菓子を仕入れて卸すという仕事がある。これは、その学童保育所が社会福祉協議会の管轄にある場合に限るが、八王子では44カ所ある。社会福祉協議会と契約を結び、卸の仕事をしている。これもＢＬＧの前身のデイサービスが、社会福祉協議会ボランティアセンターの簡単な作業を１年間行った結果、信用と評価を得たタイミングの中でメンバーからの「子供たちと遊びたい」という思いを聞いた事がきっかけで子ども達との交流が始まった。学童を利用している子ども達から駄菓子を買いに行けないので何とかしてほしいという声を聴き、ＢＬＧのメンバー達と学童保育で駄菓子を販売する事になった。これも１年ぐらいかかったが、メンバーの声や、無償のボランティア活動を積み上げて得た信頼を築くことができたので、今に至っている。今は逆に企業からお声がかかるような流れになっている。

靴べらについて。これは地域のカフェや雑貨店、美容室等で販売している。直接電話注文でも販売している。１本500円だが、インターネットでは、靴べらが5,000円ぐらいで販売している事が判明した。今は、どうしたら5,000円で売れるかというプロジェクトを立ち上げる予定。これを作っているメンバー達は、本当に売れるの？と言いながらも一生懸命作成している。

粟田部会長：通所介護だから一応、介護保険で要介護認定を受けている事は条件としてあるが認知症の有無は関係ないと。

鴇田委員：定員が少ないという事でこれだけの活動ができるのか。

守谷氏：定員は８名と少ないが、グループに分かれて活動している。全員が同じ活動をするとは限らない。職員も三～四名体制であるため、１人の職員が対応するのにはちょうどよい人数となっている。10名くらいまでは対応可能。

粟田部会長：定員10名ぐらいであれば、経営的にも大丈夫か。

守谷氏：黒字になっているので、大丈夫である。

鴇田委員：家族介護者の会等で見学に行くということは可能か。

守谷氏：コロナ禍のため今はお断りしている。我々も外食や外出プログラムを控えている状況があるため、落ち着いたら見学にいらしていただきたい。

粟田部会長：大変素晴らしい活動である。特に、介護保険サービス事業所に認定を受けて通所しながら、仕事をして給与を得るという、そういうことが平成30年から介護保険制度では許されるようになった。日本の介護保険制度は素晴らしい。ただ、さとう氏は多分、ボランティアではないのか。多少は給料をもらえているのか。

さとう氏：しっかり時給を頂き、スタッフとして働いている。

粟田部会長：さとう氏は、完全にスタッフ側なのか。認定を受けてサービスを利用しているという立場ではなく、スタッフとして関わっているのか。

さとう氏：スタッフとして関わっている。住まいのある●●市から八王子まで通勤をして、スタッフとして１日を過ごしている。

粟田部会長：同じ若年性認知症であっても、サービスとしてBLGを利用している人もいれば、そこで働いている人もいるという、そういう事業所をＢＬＧは生み出したということで、これは大変なことである。こういう事業所のいいところ、大切さ、感想でもよいのでお話しいただきたい。

さとう氏：私が介護職の資格も何も知識もない中で、守谷氏が受けて入れくださり、今は当事者としてもすごく居心地がいい場所でもある。認知症でなくても多分、人として、スタッフとして働いていてもすごく居心地のいい場所だと思っている。当事者として介護職で働くことのメリットはたくさんある。当事者目線での気づきもある。私のように認知症と診断されても、いきなり重度になるわけではないので、初期の段階でこうしたデイサービスや、介護施設で働けるようなサポート体制が整ったところで、当事者が活躍できる場が、今後増えていくとよい。お互いにいい関係性を築くことができ双方にメリットがあるのではないかなと思う。

粟田部会長：認知症サポートや認知症支援、認知症ケアの在り方は、こういう在り方が基本なのだろ。介護保険制度は、いきなり食事、排せつ、入浴介助というのを介護と定義しているが、それは認知症の有無に関係なく、重度になった人達にはそうかもしれないが、まだ必要としていない人達もいる。じゃあ何も支援を必要としないかといったら、そうでは

なく、こうした就労や社会参加等ができる支援を、事業としてつくり出す事が、本来求められているのではないか。さとう氏の体験がそれをよく表している。大変勉強になる。

近藤委員：本当によい取組である。施策への「参加型」が、いろいろな場面で言われているため、どのようにしたら文京区版ができるのか、皆様のご意見も伺ってみたい。

藤原委員：私たち民生委員は、このコロナ禍においてあまり活動できていない。高齢者の方と接すること自体がよくないのではないかという感じで、お家に伺うことができないため、お手紙を出して状況を伺うなど、工夫はしている。今、守谷氏のお話を聞いて、高齢者のみならず、きちんと感染対策を行った上で、普段と変わらぬ生活が送れるように、日常を奪わないというのは大事なことであるため、実現していくことの大切さを感じた。

新堀委員：このコロナ対策下で、人と会うことが減り、接遇するチャンスも減少している事に対して危惧している。特に高齢の方は、人と会っていないことによる、意欲の低下と感染リスクとどちらかを選択をしなければならないような状況で今後どうしていったらよいのか。

また、こういうオンラインを活用した人と接する方法もなくはないが、インターネットを活用されている高齢の方とそうではない方を、我々の仕事的には、活用されていない方々をどうやって人と線を繋いでいくかが悩みどころである。要するに、オンラインで対応できる方を対象に何かイベントを開催しても、その方々は誰かと繋がれている。こちらで一番心配するのは、繋がっていない方々である。そうした方々への対応を検討する必要がある。

それから私どもの施設で職員が陽性となり２週間ほどデイサービスも休止したが、安全対策をしながら最低限、活動を止めない工夫が必要と感じた。BLGの活動では、デイサービスへの参加が、受動的ではなく積極的に参画していく姿勢、活動に取り組んでいくという姿勢が、非常にいいなと思った。

粟田部会長：地域包括支援センターの最前線では、サービスにも相談にもたどり着かない社会的に孤立している人が地域にたくさんいるということが分かっているが、把握することも困難であるし、支援もできないというジレンマの中でどう解決していけるとよいのか、今後考えていかなければならない課題である。

新堀委員：地域の高齢者の方、いわゆる75歳以上の方の見守り訪問活動が今年度から開始しているが、コロナ禍で訪問活動が難しいため、電話とポスティングによる活動を地道に継続している。

岡江氏（認知症支援コーディネーター）：質問。BLGのデイサービスの場合、52歳から87歳

という年齢の方が通所しておられるが、事故の発生が一番恐れるところかと推測する。運営側として、どのように対応されているか。

守谷氏（ゲスト）：ご本人の事故、ケガ対応について。もちろんケガや事故が生じないように、転ぶ前に支えられるようスタッフの立ち位置は注意している。小さなケガは結構あるが、ケガや転倒の可能性について事前にご家族に説明する。書類等は交わしていないが口頭で了解を得ている。ご本人達の中にも「俺たちが、好きなことをしていてケガするのは、自分の責任でしょ」という考え方がある。それは我々と同じ事。もちろん、心配はしているが、かといって、できる限り制限する事はない。できる限りの心配をし、注意を払って活動している。先日ホンダの洗車中に展示車のフロントガラスを割るという出来事があったが、これは保険でしっかりと対応させていただいた。そうした補償もきちんと行っているため、安心して活動できる。それから、デイサービスは自宅までの送迎を車で行うものだが、電車・バス等を使える方は、ご自身で通所可としており、そうした方が数名おられる。行政からは、責任の所在についての指摘を受けたが、その辺もスタッフとメンバーとの間で解決しますという事で対応し、今は市役所担当者とも話がついている。皆さんに説明をして、承諾を得るということが一番大事な事かなと思っている。

小倉委員：質問。まず先ほどのＶＴＲでは非常に、利用者さんの温かい雰囲気、いきいきした姿が、いい音楽にのせられて、すごくハートウオーミングな印象を受けた。「民間事業者には１年がかりでアプローチした」等のご苦労を述べられていたが、そう簡単に、守屋氏のやってらっしゃることを、他の人は真似できないと思う。どうして守屋氏はこのようなことを、情熱を持って取り組もうと思われたのか、今後ＢＬＧのような活動がたくさん広がっていったらいいなと思う願いを込めて、教えていただきたい。

守谷氏（ゲスト）：私は以前、大きな社会福祉法人のデイサービスの管理者をしていた。そこは、どんな方でも受け入れるデイサービスとして、感染症の方、点滴をしている方、熱がある方も含めて、療養型的な医療依存度の高い方も受け入れていた。そこにある日、当時66歳の見た目はどこにでもいる男性の方、でもお話を聞くとちょっと物忘れがある、だけど体はすごく元気な方。走ることもできるし、ジャンプもできるというような方がいらした。だけどその方が、そうした高齢の方がメインの、どちらかというとレクリエーション的なトランプや、ゲームをするような活動をしているデイサービスで、休みがちとなられた。私たちなりにその方に役割をお願いして、何とか来てくださるような働きかけをしたが、どうしても行きたくないとおっしゃった。その時に、既存のデイサービスのサービ

スの限界を感じた。独立をしてその方がやりたいことを楽しめるデイサービスをつくりたいと思い、このＢＬＧの前身のデイサービスを立ち上げた。私もその方と出会い、その方の思いをどうにか実現したいなという思いでスタートして、今ももちろん、今、一緒にいる、皆さんの思いを何とか一緒に実現していきたいというそんな気持ちだけでやっている。

中谷委員：コロナ禍の中で、孤独な方、認知症でひとり暮らしの方もいらっしゃるが、外出時にマスクをつけ忘れてしまい、そもそも感染予防の概念が理解できないという方々が、地域から大丈夫だろうか？！みたいな形で、浮いてしまうとう事があり、考えさせる状況。きちんと説明すればマスクをつけてくれるが、どうしても忘れてしまう。その辺、周囲の優しさみたいなものが、今後問われるのではないかと感じている。

それから、在宅生活の中で、デイサービス等々というのは一般的な支援の一つではあるが、年齢的に若い方には、デイサービスについて「お遊戯するところ」みたいな印象を持ってらっしゃる部分があり、「私、お遊戯じゃなくて仕事なら行くよ」と、おっしゃる。仕事というのはボランティアではなくて、何かしらの対価のあるものを仕事と呼んでいるところも、私には理解できる。そこをＢＬＧがきちんと対応されているのだと改めて知る事ができたし、自分たちの社会資源の中にそういうものができるといいなと感じた。

粟田部会長：今、80歳ぐらいの人でもそのようにおっしゃる。「デイサービス行って、お遊戯みたいなことをしたくない」と。80歳ぐらいの方でもしっかりされている方はたくさんおられる。考えなくてはならない。

マスクの事も「マスクをした方がいいよ」ときちんと説明してくれる存在が身近にいる事が重要である。そういう人もいない状況を何とかなくせないだろうかと感じている。

小泉委員：質問。先ほどのDVDを視聴してデイサービスに皆さん参加されている印象を受けたが、参加される前と参加された後で、皆さんの変化があったら教えていただきたい。

さとう氏（ゲスト）：私も診断直後は、引きこもっていた。とにかく地域に支援がなかったので、日々、本当に引き籠って、外に出るのも、買物に行くのも億劫だった。それがＢＬＧと出会い、メンバーさんたちと共に洗車活動や、地域のポスティング、そういった活動を通して、達成感を得る事ができるようになった。先ほどの洗車のＶＴＲにあったようにメンバーさんそれぞれが、得意、不得意があるので、一つのこと、例えばホースを持ってくる、バケツを持ってくる、お水をかける、高いところを拭いてくれる方がいる、そこでなかなか目の行き届かないところを、細かいところを逆に拭いてくださる方がいる。一つ一つのことを、みんなで積み上げて洗車が出来上がる。暑い日も寒い日も、メンバーさん

達と、共に活動した後に、今だったら温かい飲み物を飲みながらホッとする時間を持つ。日々、達成感を得てやり切った感がある。私も、メンバーさんを見ていてすごくイキイキとしている姿を、日々、そばにいて感じている。その瞬間は、私もうれしい。

守谷氏：補足。この活動は、あくまでも家庭生活の延長線上にあると考えている。さとう氏が話したとおり、充実感や達成感があると「今日もやってきたよ！」みたいな、笑顔で帰ることができる。そうすると家族の介護負担もかなり変わってくる。しかめっ面で帰ってきたら、迎える家族も暗い雰囲気になってしまうが、笑顔で帰ってきたら「今日、じゃあお父さんちょっとお酒１杯つけるね」みたいな感じで、夫婦の会話も生まれる。たまに給料を持って帰ると、家での居場所ができる。今まで、認知症と診断されて、「家族に申し訳ない、迷惑ばっかかけてごめんね」という気持ちから、その時だけは、「これで好きなもん買え」というような、そんなに多額ではないので買えないかもしれないが、それでも自分の居場所ができて、またご家族との会話も生まれるので、ＢＬＧに来る前と来た後では、本当に変化があると思う。

家族から、「これやっちゃ駄目、これ危ないから駄目」と言われている中で自信を失っている事も多い。しかし、ＢＬＧでは任されている事が多いので、それを成し遂げた充実感というか、自信の回復の場でもあったりする。そうした事もあり、皆さん、顔つき自体が違うかもしれない。そのくらい変化はあったと思う。

岩井委員：地域ケア会議などの課題でも、以前もそうした、特に若年の認知症の方の居場所、お仕事を含めた活動ができないだろかと話し合われてきたが、やはり形にする事がとても難しいと感じていた中で、本日は大変参考になるお話を伺えた。

私たちの力では、認知症のカフェを開催する等活動が限られている中で、どれだけ自分達もやってみよう！ＢＬＧを文京区につくろう！みたいな思いを持ってくださる方を広げていくかが、これからの課題であると感じた。すでに素晴らしい活動を展開されているが、逆に課題に感じてらっしゃる事や、困難に感じてらっしゃることがあれば教えていただきたい。

守谷氏（ゲスト）：今のところ、特にないかなと。困難なのかもしれないが、困難と感じてないだけかもしれない。

さとう氏（ゲスト）：メンバーさんとともに乗り越えているのではないかと感じている。

守谷氏（ゲスト）：何とかなる！みたいな感じに近い。私もメンバーさんに救われていたり、助けられたりしている。みんなといると元気になる。我々が何か提供しているのではなく、当事者の人たちから本当に元気をいただいている。

阿部委員：とてもいい活動報告を聞かせていただいた。みなさん、そういう活動をやりたいなと思っていても、実現できない事も多い。ただ、自分たちにもできる事を少しずつ見つけていきたい。私達も支援の中で、本人はデイサービスが行きたくないという方に対して、家族の負担軽減や、行ったほうが活動的になれるということが分かっている人たちに対して、どのようにデイサービスに繋げていこうかと考える。それには、「行きなさい」と言うだけでは駄目であり、本人の考えや、声をしっかり聞いていく事が大切である。その人の声を、どういう形で支援に繋げていくか、支援チームで考え、協力し合あう事で繋がりやすくなると実感している。

文京区にもBLGのような場所があればいいなと思うが、なかなか難しい。であれば文京区の中でどういう形であれば、実現できるかを考えていきたい。

神戸委員：僕は、６年ぐらい前に町田のＢＬＧに丸一日、研修に行ったことある。朝、ホワイトボードにその日やることをみんなで決めるというのを懐かしく感じた。ＢＬＧにまつわる話で、よくある切り口が、「働くなんて我々のデイサービスでは無理だ」と。なかなか同じ事はできないという切り口から話が始まる事が多いと思われるが、今回、守谷氏やさとう氏のお話を聞かせていただいて、再確認した。「想いをカタチに」というコンセプトが大事であると。「働く」というのはツールだよという言葉があったが、まさにそれだなと。BLG文京区版という話もあったが、形だけ同じものを持ってきても駄目だろうなと。または、「働く」というところだけ切り取っても駄目だろうなと。恐らく、その「想いをカタチに」というので、仲間、居場所、感動とか、そういうキーワードを基に、そこにしかない想いをカタチにするということをそれぞれの場所でやらなければならないだろうと感じた。

そして質問。行政の会議という事もあるが、行政の仕組み、介護保険サービスの仕組み、枠組みがこの活動の制約になるというようなことが、もしあれば共有したが、いかがか。

守谷氏（ゲスト）：八王子市では、社会参加等の活動において、許可は頂いているが、自治体によっては、外出不許可もある。厚労省は社会参加を認めてはいるが、都道府県レベルでは不許可というところもある。解釈の違いがある。実際は平成30年に介護保険最新情報の669番で、社会参加というものが認められている通知が出ているので、ぜひ解釈を平らなものにしていただきたいし、しっかりと受け入れてもらえるように、我々ももっともっと活動を広げていかなければならないと感じている。最初は八王子市も不許可だったが、福祉部全体で協議及び、勉強会を行い、その結果受け入れてもらえた。ただ一番強かったの

は前例がある事。町田市の前例があるからこそ、我々もスタートできたという事も大きかった。先ほど100ＢＬＧの話も出たが、行政に対しても、その他のいろんな方たちにも活動を知ってもらい、場を増やしていくようなことも、さらに頑張っていかなければならない。そうすることによって、皆さんが見る社会の風景が変わるだろうなと思っている。私たちだけでなく、これは本当に皆さんのご協力があってできることだと思っている。

粟田部会長：本日は、守谷氏、さとう氏に、とても刺激になる良い話をいただくことができた。文京区に大きなンパクトを与えられたのではないか。介護保険事業は区市町村の裁量でいろんなことができる事業なので、とても重要な話を伺えた。感謝申し上げる。

それから、コロナ禍の問題に関しては、高齢者施設のクラスターが大変大きな問題になっており、次から次にクラスターが発生し、それに対する対策に追われている現状がある。医療機関でも次々にクラスターが発生し、こちらも対応に追われている状況がある。ただこれは、だからといって閉めるわけにはいかない。感染者が出現したらそれに対する適切な対応をしながら、今後も徹底的な感染対策を続けながらサービスを続けていくというスタンスは介護事業所も医療機関もやっていかなくてはならない。今日のような地域の活動も徹底した感染対策を続けながら、平時の活動をなるべく続けていかなければと思う。そのために皆さんと力を合わせていきたいと考えている。

本日は、意義のある活発なご意見ご答弁に感謝申し上げる。

進課長：資料３と４について。

まず、資料３「認知症検診事業」は、来年度の重点施策として実施する。医師会やエーザイ株式会社の協力を得て、一定の区民を対象とした認知症検診を実施していく。

資料４「在宅要介護者の緊急一時入所事業（令和3年1月開始）」の資料である。家庭内で新型コロナウィルス感染症が発生した際、介護されていた高齢者が取り残されないように緊急一時的な入所できる施設を確保した事業となる。区内の高齢者施設を運営する法人に委託し、施設の一部を借り上げて実施していく。

粟田部会長：それでは、令和2年度第2回認知症施策検討専門部会を終了する。ご協力に感謝申し上げる。